ブータンミュージアム通信 vol. 18

■目　次

2　経済合理主義だけでは決して人は幸せになれない　森 建司
4　最後の審判の瞬間　ソナム　ワンモ
8　日本の様式を学ぶ旅　ソナム・チョキ
13　子供たちに見る幸せの形　松田宗一
20　ブータンの一口メモ　国王の定年制について
22　第 10 回おしゃべりサロン開催レポート
26　アジアの村を歩く⑱　松田宗一
28　編集後記

ソナム チョキさん　撮影 松田宗一

経済合理主義だけでは決して人は幸せになれない

森　建司

現実の社会では経済の裏付けがないと生きていけない。何かを目指して、それに向かって進んでいくためには、単に自分個人の欲望だけに固執していなくても、つまり社会的に貢献する事業であっても、経済の裏付けは必要である。

そのためにさまざまの経済社会の企業や機構が生まれている。

つまり、製造 (農水産を含め)、販売、流通、サービス、そして教育、医療、介護、芸術、芸能、宗教などなど、挙げればきりがない企業分野や、社会事業分野が出来上がっている。

人は生きている限りこの社会機構の、どこかに所属しなければならない。そしてこれらの団体や機構はすべて採算が合わないことには存在できない。企業経営などで経費以上に収入をあげ個人が恩恵を被っている人もいるだろうが、そうでないところも多いはずだ。したがって個人はみな「採算性」に関心を持たざるを得ず、中には本来の事業目的に外れていても採算に合う方向に走ってしまう人もあるだろう。

人が生きていく以上は「採算性重視」は避けて通れないものである。それだけにこれを人生の倫理として生涯忘れないように、子供の躾から、学校教育、社員教育など生涯を通じて、一貫して「ものを粗末にしていないか」「無駄遣いをしていないか」「得をするのか」「損をしないか」「人に騙されないか」「人以上に頑張って努力しているか」等、挙げればきりのないほど叩き込まれ、体験的にも学び、実行を心掛けてきたはずだ。

この倫理観を「経済合理主義」と呼ぶ事にしよう。

ここで「経済合理主義」と呼ぶのは、金銭をはじめ自らの資産・財産を増やすためばかりでなく、今日の過激な「競争社会」において、勝利を勝ち取り、相手を敗者として葬る、その為の貴重な判断基準にもなっている。

この「経済合理主義」は生きていく以上必要なものではある。しかも厳しい「競争社会」の中において勝ち残っていくためには、条件として、強い自分を創り上げなければならない。

人が強くなるためには「信じるもの」をもって、その方向に徹することだといわれている。行動を起こそうとするとき、この自分が結論を出した「合理主義」に照らして、絶対に大丈夫ということを確信し、それを強く信じて行動を起こせば、必ず、勝利が得られると言うことなのだ。

オリンピックのメダルや、ビジネスの成功、芸術、芸能、職人技術、研究の成果、などなど志を立てて、「努力をすれば必ず勝ち取れる」と強く信じてやれば、どんな辛抱も乗り越えられる力が湧いてくる。（……結果は、色々あるかもしれないが）

信じるということは論理的に証明できなくても、隠れた能力を引き出してくれる力はあるものだ。しかし「こんなことをやっても俺には無理だ、出来ない」という思いが心のどこかに生まれてくると、途中で挫折してしまう。

こうして、結果的に競争社会の勝者が特定される。そして時間の経過とともに、それが社会的地位とか権力になって、支配層と被支配層に二極化する社会構造が生まれる。そして支配層は裕福になり、被支配層は搾取されて貧困になる。この状況を是正する手段が世論とか政治とかによって講じられるべきであるが、それはなかなか難し

い。極端な二極化社会では時には革命が勃発したり、そこから長期にわたる内戦が始まったりして、人々は大変な不幸になることもある。

さて、経済の成功者は欲望も広がり、それが達成される喜びや満足感があり「幸せ」になれるのだろうが、そこに到達する間に「競争社会」の戦いが繰り広げられ、数多くの敗者を生み出し二極化社会の被支配者を、「不幸」にしているはずである。

もちろん人生は経済だけでできているものではない。お金が幾らあっても買えないものはたくさんある。肉親や周辺の人たちとの交流や、自身の好みの世界をつくり上げていくことなど、「幸せ」の条件はそれぞれの人の心で創り上げていくもので、モノに囲まれた、物質的な豊かさだけが「幸せ」のすべてではない。

しかし、現在では豊かな経済だけが人の「幸せ」であるような思いが大きく広がり、経済合理主義のみに基づく判断基準に自らを賭けていくのが、現代人の象徴であるかのようである。

政治も経済界の強い影響を受けているのか、経済成長志向最優先であり、学校教育も企業の生産性を上げるための、システムの合理化や新製品の開発等に貢献できる企業人を育てるためか、理数系が重視され文系がおろそかになっているのではないか。特に人類社会の基盤を作る哲学的な思考などが薄くなり、長い未来を志向して社会や人のあり方を考える機会も少なくなってきているようである。

話が変わるようだが、私は「幸福」という表現は使わない方が良いのではないかと思う。「幸せ」は人の心にあるものであり、「福」は裕福の意でモノに豊かに囲まれることを意味する。にもかかわらず、これが一緒になって単語として使われると「幸せ」は「裕福」であることが第一条件であるかのように信じ込ませてしまう。それでは人類の未来が案じられるような気がするのだ。

また機会があれば、このようなテーマで皆さんと議論でもしませんか。

森　建司
１９３６年、滋賀県生まれ。新江州（株）元社長・会長。アグリビジネスカフェ座長。３００年経営塾塾長。循　環型社会システム研究所代表。
Ｍ・Ｏ・Ｈ（もったいない・おかげさま・ほどほどに）　の精神を社会倫理として再構築、普及させることで、持続可能な社会を目指す。
著書『中小企業が生きる道 もったいない・おかげさま・ほどほどに』（サンライズ出版）など

最後の審判の瞬間

福井大学教職大学院留学生　ソナム　ワンモ

ブータンから来られたソナムさんは、今年３月までの１年半にわたり、福井大学教職大学院で物理の教科指導法を勉強しておられました。以下の文章は昨年９月末頃に書かれたものです。

私が福井に住み始めて１０か月以上になります。１０月から始まる最後の学期がまだ残ってはいますが、これまでの２学期間、日本語を勉強してきて言えることは、これまで歩んできた旅は、私がここで研修するよう選抜されるまでその存在すら知らなかったこの土地について、より深く理解するための助けになったということです。私はこの辺りでちょっと一息入れて、私のこれまでの状況を改めて振り返ってみると、ここに最初に着いた時から現在の自分に至るまで、私が辿った変化の道のりを記すことは大変すばらしいと思っています。

ブータンから日本に向けて旅立った時には日本語はこれっぽっちも知りませんでした。私がいつもしていた行動は、日本語を話す人たちの顔を見つめ、ほんの少しさえも理解していないのにいつも頷づいていることでした。というのは、理解できませんとか、もう一度説明してもらえますか、という日本語の言い方も知らなかったからです。たとえ、どこへ行きたいかを日本人に何とか理解してもらえたとしても、その後に帰ってくる答えを理解することが難しかったのです。説明を繰り返してくれる人も中にはいましたが、私は表向き理解しているように反応しなければならなかったのです。私は兄弟や友達が、英語さえ知っていたら世界中どこでも簡単に旅行ができると言っていたこの言葉が全く通用しないということを初めて感じました。また、私はブータンにいる姉に、私の福井での立場は、ブータンにいる教育を受けていない人の立場とは全くちがうよと言ったことを思い出しさえします。というのは、メールをもらっても、それに対応するためには、すぐにそれを私に説明してくれる人を探さなければなりませんでした。自分の住所を書くためですら、誰かに助けを求めなければならないのです。今もこうしたことが続いていることは同じですが、何かお願い事をしたくて人に近づいていくときの仕方が変わりました。これまで受けてきた授業の中で覚えた初歩的な日本語のおかげで、私の生活はようやく安定軌道に乗ったのです。

もうひとつは、日本でのガス料金や電気料金の支払い方がブータンとは全く異なることです。コンビニがありませんから、電気会社の所管の部署で支払いをするのです。えっとそれから、ゴミの分別というのが、ここ日本で経験しなければならないもう一つの新しいことがらです。分別は大変いいことで、称賛すべき行いです。最初は分別しても、私の分別の仕方がこれでいいのかどうか自信がなくてとても不安でしたが、時とともに自信がついてくると、この不安も徐々に無くなりました。

列車は、最も一般的な交通手段のひとつではありますが、これもどこで乗ればいいのかを理解するのが大変厄介なもののひとつです。というのは、ひとつには表示板の情報が漢字で書かれているからです。当初は暗号のように見えました。今はそ

うでもありませんが、漢字が分かるようになったからではなく、あちこちで見慣れたからですが。私が申し上げたいことはそうではなくて、以前のように列車の出発時間の３０分前に駅へ行っても、乗り場が分からなくて乗り損ねていたころと違って、今は何とかこの困難を乗り越えて自分で何とかすることができるようになったということです。最近はほとんどこうしたことはありません。こうしたことは、今振り返ると笑い種となるような楽しい経験です。

要約しますと、よそ者としてやってきて、ようやくこの土地についてほぼいろんなことに慣れてきた頃に福井を去らなければならないんだろうなあと考えると、私は悲しくなります。というのは、これまでここでの生活は本当に快適なものでしたし、今から半年後にブータンに帰るころまでにはさらに快適になっているだろうからです。

これまで学んできたあれこれ、ひとつひとつが現在いる大変快適な生活領域にゆっくりと徐々に私を導いてくれたのです。私はしばしば自問します。「どうしてこの土地について大変よくわかり始めたときに去らねばならぬのか」と。そして、私は次のように思うのです。去るときまでに学んでいるであろうことは決してこれで十分だということはないんだよということを、おそらく人生は私たちに言いたいのであろうと。だからこそ、私たちは、この学習の旅をまた最初から続けられるように違う場所へと送られるのだ。これを私は‘最後の審判の瞬間’と呼びたい。

これは言うまでもなく私にとって初めてのことではありません。というのは。子供のころからこの‘瞬間’をいくつも通過してきたからです。私が学校教育を受けたのはプンツォーリン（訳者補注　西ブータンの南端のチュカ県にあり、インドとの国境にある町）、それから３年間はインド（訳者補注　大学進学のため）、その後、オロン（訳者補注　東ブータンの南端のサムドルップ・ジョンカル県にある町の学校教員として）へ、それからダンプー（訳者補注　中央ブータンの南部チラン県の町にある学校教員として）、そして今現在は、１年半の予定で福井に来ています。この後、どこに私が行くかはまだわかりません。でもひとつ言えることは、どこへ行くことになろうとも、私にとってそこは学問の道を続けるのに最もふさわしいところなのでしょうし、またひとつ別の’最後の審判の瞬間‘に遭遇するまで、人生が私を導いて行ってくれるであろう土地の神秘のベールを剥がす体験ができることを強く楽しみにしています。

THE MOMENT OF TRUTH.

I have been living in Fukui for over 10 months. Having studied nihongo for two semesters with the last one yet to start in October, I must say that the journey I have walked so far helped me gain a deep understanding of the place ,the existence of which i didn't know until I was selected to pursue my training here. At this point of time when I take a pause and look back to the condition I was in ,when I first reached here to what I have become now, it's so beautiful to note the transition I went through.

Not even a little did I know Japanese language when I started for Japan from Bhutan. Looking at the faces of people speaking Japanese and constantly nodding without even understanding a bit was a common act being put up by me,for I didn't know how to say , we didn't understand or can you explain it once again. Even if we could manage to make them understand where we wanted to go, it was difficult to understand what came as an answer after that. Some repeated their explanation and I had to respond being seemingly understood. For the first time,I felt the words of my elders and friends being defied with a great intensity since they said if one knew English,one would easily be able to travel every where in the world.I even remember telling my sister back in Bhutan that my status in fukui was no less like any uneducated person in Bhutan. Because the moment I received any mail, I had to go out looking for someone who could explain it to me, so that I could act on them. Even to write my own address I have to seek help from others. Although it's the same thing being continued even now, the way I approach people for favour have changed and the rudimentary Japanese language that I acquired from the classes I have attended so far, my life has embarked on a smooth trail.

The another is the way gas and electric bills are paid here,which is so unlike Bhutan. We don't have convenience store ,rather we pay electric bills to the department of Power corporation. Having said this Garbage segregation is another new thing that I got to experience here and it's my most-appreciated and most-admired activity, doing which I felt quiet awkward in the beginning as I wasn't sure if what I did was right. However, the awkwardness gradually disappeared clearing the way to confidence as time passed by.

The train being one of the most popular modes of transportation had also been one of the most complex things to understand From where to catch them, partly because the information on display were in kanji, which appeared wired to me then. Not anymore though. That's not because I know them, rather because I got used to seeing them every where. But that's not the point. The point is I got over the difficulties and can manage on my own.unlike before going to train station 30minutes before the

scheduled time and still missing it by not being able to locate the platform ,hardly happens nowadays. Nonetheless, that was an amusing experience worth looking back to see myself laughing.

In gist I walked in as a stranger and the mere thought of having to leave fukui after getting acquainted to almost everything about the place,saddens me because by this time life has become really comfortable and will be even more by the time I leave for Bhutan after six months from now.Every bits and pieces that I learnt along the way, pushed me slowly and gradually into the comfort zone that I am into at the moment. I often ask myself: why do we normaly leave the place after knowing about it very well?.Then I thought, perhaps the life intend to tell us that what we would have learnt by the time we leave, have not been enough ;owing to which we were sent to different places to proceed our journey of learning all over again.To this I refer as ,'THE MOMENT OF TRUTH'. This is obviously not going to be my first time as I have already been through since my childhood.I remember being in Phuentsholing where I completed my entire schooling followed by India for three years. After that to Orong, then to Damphu and currently in fukui for a year and half. After this where I would be is not known, but all I know is wherever I happened be will be the most appropriate place from where I will resume my course of learning and I am eagerly looking forward to uncovering that mystery the life intend to take me through

until I encounter another moment of truth.

日本を学ぶ旅

ソナム・チョキ

現在、私はブータンのロイヤル・ティンプー・カレッジの経営学部に在籍している学生です。今から遡ること１０年前の２００７年、まだ私が小学生だった時に、一人の日本人旅行者が私の写真を撮影しましたが、当時、私は撮られていることは知りませんでした。後に、その写真は日本のミュージアムの一つに使用され、また日本の駅の一つにも（当ミュージアム宣伝のための駅構内の看板上　訳者補訳）にも使用されることになりました。昨年 2017 年に、ブータン文化の熱烈な愛好者で、私の写真を福井のブータンミュージアムに使用した野坂氏が私のことを探しはじめました。ブータンの人々が、(小学生の頃の）私の写った写真をいろんな媒体を通じて目にすることになり、（その結果、私だと判明することになり　訳者補訳)、同年 7 月 12 日、ついに私はミュージアムの元理事長（野坂氏）と出会いました。その写真は 2007 年に撮影されたもので、当時私は小学 6 年生でした。

それは、私にとっては、そして彼にとってもそうであってほしいですが、感激的な瞬間でした。私は、これまで本の中で読んだり、映画の中で見たストーリーの中にいるように感じました。しかしながら、我々はうまくコミュニケーションが取れませんでした。というのも、私は日本語についての知識が全くなく、野坂氏もそれほど英語が堪能ではなかったからです。そこで、私たちは私に日本の文化に興味を持たせるための計画をスタートさせることにしました。

野坂夫妻の惜しみない援助により、日本語の基礎学習コースに登録するところから始めました。2018 年の 1 月の中頃までにそのコースを修了し、まだまだ基礎レベルではありますが、日本語を話し、理解できるようになりました。彼等の言語や文化を学べば学ぶほど、日本人の生き方により惹かれていきました。私は、日本への理解の範囲をより広げてくれるのではないかと期待しながら、たくさんの日本のアニメ映画を見たり、ＮＨＫのドキュメンタリー番組を見たりしていました。これはすべて、大学での学業に支障がないようにしながら同時におこないました。

福井のミュージアムからブータンを訪れる他の職員たちともお会いしましたが、その毎回が胸躍るものになりました。福井にあるこのミュージアムはブータンに特化した小規模なものですが、ブータン以外では、そのようなミュージアムはそこ一ヶ所です。こうしてしばしば面会したり、メールのやり取りをする中で、私の大学の休暇中に訪日する計画が立てられました。

そして、私は 2018 年の 1 月 18 日に、大学から車で 1 時間の場所にあるパロ国際空港から出国しました。ブータン航空でバンコクに降り立ち、そして、次の目的地である日本の大阪に向けてタイ航空で出発しました。これが私の初めての海外旅行、そして初めての一人旅でした。私は自分がもうすぐ日本に着くんだとワクワクしてましたが、同時に不安でもありました。

そして、数時間のフライトの後、私は大阪に到着しました。私はすべての通関手続きをドキドキしながら通過しました。そして、空港を出た時、

野坂夫妻が私を待っているのを見つけたのです。飛行中や空港での何時間も不安な時間を過ごしたあとに彼等を見つけた私は、とても安心しました。「わ～、やった！」、と心の中で叫びました。。

ホストファミリー、いえ、2番目の両親と呼ぶべき二人とともに、特急で福井県に向けて移動しました。このような速い列車に乗ったのは初めてだったので、私はまた興奮しましたが、同時に不安で一杯でした。私達は福井で列車を降り、タクシーでブータンミュージアムに向かいました。大きなサプライズがミュージアムで私を待っていました。私の10年ほど前の写真が載っている大きなポスターが、ミュージアムの正面と、館内に飾られていたのです。

福井への旅は胸躍るものでしたが、私にとって新しいことをする際には、いつも緊張と不安で一杯でした。第2の両親との初めての食事のとき、私たちは中華レストランへ行きました。多分、彼らは中華料理がブータン料理に一番近いだろうと考えたのでしょう。昼食の前、私は少し心配していました。というのは、一般的にブータン人にとっては、日本人の味覚に合わせるのは難しいと友達や家族から聞いていたからです。しかし、その日は、私は全く問題なく食事を楽しみました。

その後の日々においては、私はブータンミュージアムのメンバーから歓迎会で温かいもてなしを受け、また同じブータン人の仲間にお会いしたり、第2の両親や、その近くにおられる他の人々ともより親交を深めました。それは家庭的な雰囲気でした。私は、両親や兄弟と家にいるような気がしておりました。私と第2の頼りになるお母さんとは、いつも一緒に料理をしました。その間に、私は日本の料理の仕方を学びました。毎晩、彼女と日本語の勉強をしました。私はついに、日本語を習得したいという私の希望を満たすことができました。

1ヵ月間の福井滞在の間、私は毎日新しい経験をしました。私はミュージアムで毎月開かれている「おしゃべりサロン」に参加し、ブータンの若者についてお話ししました。ミュージアムが主催している「ハピネスコンサート」では歌を歌ったり、イルカショーを見学したり、星を見にプラネタリウムにも行きました。さらに非常に有名な恐竜博物館や、日本で一番大きな仏像である勝山大仏も訪れました。ＮＨＫと福井テレビを訪れ、今回の私の旅についてのインタビューを受けました。最近私は日本のアニメ映画に関心を持っていたので、アニメショップにも行きました。折に触れて通りをウロウロしました。大野と呼ばれる場所を訪れた時、我々は吹雪に見舞われました。これは少し怖かったです。また、私は日本の伝統的な生活様式で有名な京都も訪れました。福井と異なり、多くの旅行者や若い人達を目にしてワクワクしました。

興奮した瞬間の一つは、私の写真を撮った人とついに出会えたことです。松田氏は、私のふるさとであるブータン中央部のブムタンにある小学校から家に帰る途中に、その写真を撮影したのです。それは11年前のことで、その時私は13歳でした。私は彼が写真を撮ってくれたことを感謝しています。そのおかげで私は日本の生活様式について、より詳しく学べることになったからです。

私は、ブータン人と日本人の生活が似ていることに気付きました。私は、若い世代の人が年長者に敬意を払っている姿や、同僚に挨拶する姿を見て嬉しくなりました。そんな雰囲気の中で生活して

いたので、私は家にいるような気持ちがしていました。でも悲しかったことは、おそらくグローバル化の影響からか、人々が日々の仕事に流され、家族の絆を強めるための時間が少なくなっていることでした。ただこれは、とてもたくさんの年配の方々が買い物を、それもおそらく毎日しているのを観察して私が感じたことにすぎませんが。

時間が経つのはあっという間でした。私がまわりの環境や人に十分馴染んで心地よくなったころには、もう帰国の時でした。私はブータンミュージアムのメンバーとお別れの昼食会をしました。本当は、あの日話したことよりもっとたくさんの感謝の気持ちを表したかったです。

次の日、福井を離れるとき、私は辺りの風景を目に焼き付けて、とても感傷的になりました。福井は素晴らしくて、素敵で、美しい場所でした。それに加えてホストファミリーと過ごすことで、私は自分が‘第七番目の天国’（＝無上の幸福の状態　訳者補訳）にいるように感じました。とうとう大阪空港に到着し、野坂夫人が「あなたがいなくなると私たちは寂しくなるわ」と言われた時、私はとても感傷的になりました。私は同じ気持ちであることと、感謝を表現したかったのですが、その時はあまりに感情が高まり過ぎていました。願わくば、この先何年か後に、また彼らといっしょに過ごせる機会を持ちたいです。野坂夫妻の幸せと健康を祈ります。彼等との再会を願いつつ。
ありがとうございました。

①越前松島水族館にてイルカショー見学
②勝山大仏参拝
③福井テレビにてアナウンサー体験
④恐竜博物館見学

My Journey in Learning the Japanese Way

Currently I am an undergraduate student in Business Studies at Royal Thimphu College Bhutan. Back in 2007 when I was a primary school kid, a Japanese tourist had taken a picture of me which I was not aware of then. Subsequently, the picture was on display at one of the museum in Japan and also at one of the train stations in Japan. In 2017 Mr. Nosaka, a passionate lover of Bhutanese culture who has my picture at his Fukui Bhutanese museum had started looking for me. Finally, when people started sharing my picture on social media, I met the museum owner at last on 12 July 2017. That picture was taken in 2007 when I was in grade six.

It was a thrilling moment both for me and hopefully for him too. I felt like living in those stories which I have read in books and watched in movies. However, we couldn't communicate well as I have no knowledge about Japanese language while Mr. Nosaka couldn't speak English well. So, we started the project of getting me oriented towards the Japanese culture.

We started by enrolling myself in learning basic Japanese language course with generous support from Mr. and Mrs. Nosaka. By the middle of January, 2018 I successfully completed the course and by then I could speak and understand Japanese language although it is still rudimentary. The more I learnt about their language and culture, the more I got drawn to their way of life. I also watched many Japanese anime movies and watched documentary on NHK channels hoping that it would expand my horizons in understanding Japanese. All these were being done while I had to keep in pace with my academic activities at the college.

My meeting with them became more exciting every time I met them and other officials from the Fukui museum who were frequent visitors to Bhutan. Fukui museum is a small gallery dedicated to Bhutan. It is the only such museum outside Bhutan. So, during these frequent meetings and exchange of emails, we came out with the plan to organize a trip for me to visit Japan during my College vacation.

On 18th January, 2018, I departed from Paro International airport of Bhutan which is one-hour drive from my college. I landed in Bangkok with Bhutan Airlines and then departed to my next destination Osaka, Japan on Thai Airways. It was my first time travelling abroad and I was travelling alone. I was excited that I am going to be in Japan soon but I was also anxious.

Then after several hours on flight I landed in Osaka. I went through all those airport procedures with a very nervous heart. Then when I stepped out of the airport, I saw Mr. and Mrs. Nosaka waiting for me. After many hours of nervousness on flight and at airports, I was so relieved to see them. I said to myself, Wow I made it!

Together with my host or I should say my second parents, then we travelled towards Fukui prefecture by bullet train. Again first time on such a fast train was exciting but filled with anxiety. We dropped off the train at Fukui and took a taxi till Bhutan museum. A big surprise was waiting for me at the museum. Huge poster of my decades old picture was hung in front and inside the museum.

The journey to Fukui was thrilling but at every new activity that I was to undertake I was always filled with nerviness and anxiety. The first meal with my host parents, we went to a Chinese restaurant. Maybe they thought Chinese food would be closest to the Bhutanese dishes. Before lunch I was bit worried as I heard from my friends and family say that in general Bhutanese find it difficult to adjust their taste

buds. Not an issue that day I enjoyed the meal.

In coming days, I was warmly welcomed with a high tea by museum members and I met with fellow Bhutanese and also got more acquainted with my host parents and other people around. It was then a homely feeling. I felt like I am at home with my parents and siblings. Me and my god mother always cooked together. In between, I learnt to cook Japanese cuisines. Every night I studied Japanese with her. I felt that at last I can fulfill my wish of mastering the language.

During my stay in Fukui for a month, every day was a new experience for me. I attended the monthly chatting salon at museum talking about youths of Bhutan. I sang a song at Happiness concert organized by the museum, saw dolphin show, went to planetarium to watch stars, visited the most famous dinosaur museum and visited Katsuyama Daibutsu, the biggest Buddhia statue in Japan. Visited NHK and Fukui television broadcasting for an interview about our journey. In the recent past I picked up interest of watching Japanese anime movies, so I went animation shops and at times went around the streets. One time when we were visiting a place called Ono, we got caught up in the snowy storm which was bit scary for me. I also visited Kyoto a place well known for Japanese following their traditional way of life. Unlike in Fukui, it was exciting to see more tourists and many young populations.

One of the exciting moment was, I finally met the person who took my picture. Mr. Matta took that picture when I was returning home from school in my home town, Bumthang in central Bhutan. That was 11 years ago when I was 13 years old. I am thankful that he took my picture and it resulted in me learning more about the Japanese way of life.

I realized that the Bhutanese and Japanese has a similar way of living. I was happy to see younger generation paying respect to elderly people and the way one greets to a colleague. It made me feel so homely living in such an environment. However, the sad thing is maybe globalization is kicking in where people gets carried away by the daily business and less time for family bonding. This was just my observation from seeing so many older citizens doing their own shopping and they seem to be shopping every day.

Time flew fast. By the time I got too comfortable with people and the environment around it was time for me to return. I had a farewell lunch with the member of Bhutan Museum. I wanted to express gratitude more than what I talked that day.

Next day as I was leaving Fukui, I gazed at scenery around, which made me feel so emotional. Fukui was amazing, wonderful and beautiful. On top of that with host family, I felt I was living in the seventh heaven. Finally, when we reached Osaka airport I got too emotional when Mrs. Nosaka said, “We will miss you”. I wanted to express the same level of feeling and gratitude but I was too emotional that time. Hopefully, I will look for an opportunity in coming years to be with them. I wish Mr. and Mrs. Nosaka a happy and healthy life ahead. Hope we meet again.
Arigatōgozaimashita Mr. and Mrs. Nosaka!

子供たちに見る幸せの形

２０１０年出版の写真集「マダガスカルを往く」の巻頭言に

「座標軸のとり方で変わる豊かさと貧困を目の当たりにする旅
その心根は豊かさと貧困は対比するものではなく
如何に生きたかを、自らに問う作業ではないかと

私たちは豊かなのだろうかと
求めていた生活をあらためて問い直す旅、
着地点を求める旅でもありました」

として、マダガスカルの旅の記録、気候、風土、人々の様子を紹介。「座標軸のとり方で変わる豊かさと貧困」という言葉を「幸せ」感に重ね合わせてみても同様のことがいえるのではないか。統計の取り方でランク、幸せの度合いは国別、地域別で大きく分かれてくる。あらためてランクを決めることの難しさとともに、人々の求める幸せ感そのものに乖離があるのでは。そこで、この項ではアジアの村々で撮影された子供たち、親子の写真を紹介しながら、撮影時の思いを伝えたい。

ブータンミュージアム　松田宗一（写真家）

ブータンの子供たち。学校帰りの子供たちは長い道のりを歩き家路につく。
その足元は、革靴、スニーカー、サンダル、裸足と様々。みんな仲良し。

マダガスカルの市場にて。

買い物を終えた子は、さっそうと道路を横切って行った。白く輝く歯が印象的だった。市場は縦と横道がいくつか交差し野菜、生きたニワトリや様々な食品が多く売られていた。小雨の中を歩きながら、店の前で立ち尽くす女の子に出会った。その場所に佇みながら、不安そうな瞳で店の前と周囲を見回していた。いつか自分も欲しいものに手が届くような生活を、と思っているのだろうか。この市場には、子供の貧困という言葉以上の生活があった。一方で店を開く母親とともに乳飲み子から１０代前半ぐらいと見える子供たちの姿が目立った。一様にその場で食事をしながら店番をしていた

紙工場では、紙は厚いが女性の細やかな手で生花をすきこんでいく。紙すきを行っている母親を待つ。長い時間、母親の帰りを待つ。それだけ家族でいられることの時間は貴重で大切な時となるのだろう。

牛の群れ、その足で水田を耕す踏耕。そんな牛を操る父親を、父の背中を見るという言葉以上に全身を受け止めようとするその息子の姿に、この仕事を誇りに思い将来を見据える力強さを見る。

ベトナムの市場で。毎週日曜日に開かれる市場は、少数民族の人々の品評会であり、中でも子供を背負った母親たちには民族それぞれの姿があった。携帯のストラップであやす母親、背中で眠りこける子供等。喧噪の中にあって、母親との外出、背中の温もりを感じる安堵感。子供たちにとって幸せのひと時。

藍染の工場で。仕事の合間に染料で染まった手をそのままに泣きじゃくる子供を背負う。安らかな顔に通い合う親子の心があった。

日頃の労働から解放された日曜日の市場。食べることは大人も子供たちも至福の一時。普段は口に入らないものも多い。

タイの農村で。旅行者が見えると店を開く。集落の中央広場は、その周囲が土産物の売店に早変わり。カメラを向けると母親の肩に手おいた。「僕の母親です」。
ベトナムの農村で。収穫を終えた家族と家路を急ぐ子供。働く親の代わりに子守り。田んぼで働く子供たち。どこにも働く子供たちの姿があり、一生懸命さと笑顔が印象的だった。家族と集落とともにある営みに、平穏な日々が続いている。

ベトナムの農村で。収穫を終えた家族と家路を急ぐ子供。働く親の代わりに子守り。田んぼで働く子供たち。どこにも働く子供たちの姿があり、一生懸命さと笑顔が印象的だった。家族と集落とともにある営みに、平穏な日々が続いている。

幸せの形はどこにでも。

収穫を終えたモミを担ぎ長い坂道を上ってきた女性。短い休憩を終えると笑顔を残してさらに家路へと上って行った。機械化はごく一部で、運搬は人手かバイクに頼っていた。売店のある場所が集落の中心部と思われた。どこにでも見られる農のある暮らしと勤勉さに、大地に根差した足元の確かさを見る思いだった。

インドの農村で。水浴びを終えた子は、濡れた下着を絞っていた。道の脇で昼食を摂るが孤独感はない。集団で遊ぶことも、周囲から離れて一人過ごすことも子供たちは自分の世界を持っている。何事にも煩わされずに過ごす時間を、大人たちは忘れてしまっているのでは。子供たちに教えられる大切な時間の使い方、そして「生」の在り方。

カンボジアの農村で。集会場の２階で母親たちの会合が開かれていた。時折聞こえくる笑い声に子供達もつられて笑い、目は母親を追っていた。親子の一体感に子供たちの瞳は夕日に輝いていた。

タイの農村で。学校帰りの子供たちは、車で家路につく。残された明るい時間に何をしようか、自由を満喫できる時空があった。

メコン川。輝く川面に釣果を喜ぶ親子。自然と共に生きる姿は、今の時代にはかけがえのない心の豊かさと潤いをもたらす。

《ブータンの一口メモ》

国王の定年制について

日本では天皇陛下が来年（平成 31 年）4 月 30 日に退位され、皇太子さまが翌 5 月 1 日に即位されることが正式に決まりました。世論の多くは天皇の意向を尊重し、政府は昨年 5 月に退位の特例法を閣議決定。特例法は 6 月に成立しました。これにより、およそ 200 年ぶりに、明治以降では初めての天皇の退位が実現することになりました。

ところで世界中の王室で国王の定年が定められているのは、ブータンだけだそうです。国王について、ブータン国憲法（2008 年 7 月 18 日公布）では、世襲制とともに、世嗣の王子または王女が 21 歳（成人年齢）に達しているときは、65 歳までという在位期間を定めています。

ブータンは約 110 年前、ワンチュク家の当主であるウゲン・ワンチュクが頭角を現し、初代国王に選ばれ王制が誕生しました。そして第 4 代のジグミ・シンゲ・ワンチュク国王の時、成文憲法の草案において、自らブータン国王の定年制を発表。そしてご自身が退位し、立憲民主制に移行することを国民にお話しされました。当初、国民は定年制に猛反対でしたが、「私は父親の死という、子供にとってもっとも悲しい時に即位したが、これはわたしの人生でもっとも辛いことであった。自分の子供、子孫には二度と同じ思いをさせたくない。」とおっしゃったのです。激務である国王という責務を全うするには若さと体力が必要だと痛感したことと、定年を設けることでデッドラインが明確になり、それまでに終えなければいけないという意識を持つことができることも理由の一つだそうです。こういった人間味あふれる理由、深い人間観察に基づいた理由で国民を納得させたのです。

前国王は 2008 年の譲位を宣告していましたが、実際には 2006 年に退位し、現国王の戴冠式は 2008 年 11 月で、前国王が 52 歳の時でした。

【参考文献】「ブータン　変貌するヒマラヤの仏教王国」大東出版社

第５代国王戴冠式

（参考）

第４代ジグミ・シンゲ・ワンチュク国王　１９５５年生（在位１９７２年～２００６年）

第５代ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王　１９８０年生（在位２００６年～）

以下は、ブータン王国 2008 年憲法〔仮訳〕諸橋邦彦・坪野和子から引用

第２条 王制

第６節 ブータン国王陛下が 65 歳に達し、世嗣の王子又は王女が成年であらせられる場合には、当該世嗣に玉座を御譲りしなければならない。

第７節 本条第９節の条文の主旨に一致する場合を除き、次に掲げるときには、摂政会議が設置されなければならない。

イ 世嗣が 21 歳に達しておられないとき。

ロ ブータン国王陛下により、宣示上において国王大権の執行が一時的に放棄せられたとき。

ハ ブータン国王陛下の龍体又は一時的な叡慮の御不豫により、国王大権が執行に至らないことについて、国会合同会議における議員総数の４分の３を下回らない同意により可決されたとき。

第９節 本条第７節ロ号又はハ号に定められる事例が重大な場合において、世嗣として信任せられている王族が 21 歳に達しておられるときには、摂政会議に代わり世嗣として信任を得られた方が、その権利において摂政となられる。

第 10 回ブータンミュージアム　おしゃべりサロン
テーマ：幸せについて語ろう！
（3 月 20 日世界ハッピーデー）

内容概略　　2018 年 3 月 22 日　青山

開催日＆時間：　H30 年 3 月 18 日（日）晴れ　13：30 ～ 15：00pm
参加者：ゲストスピーカー２名　（メイン）　ドルジさん、チェドンさん
　　来館者　10　名（大人 8 名、大学生 1 名、小学生 1 名）
　　会員　　4　名（奥村理事、栗原事務局長、会長、青山）
　　合計：　16　名

所感：今回は温かくお天気にも恵まれ、多くの方が参加してくださいました。質問も多くの方から次々と質問が相次ぎ、ブータンへの関心の高さが伺えた充実したおしゃべりサロンでした。
ただ、リピーターの参加者の中から、今回は参加者が多く、なかなか自由に質問できなかった。参加者が多い場合は 2 グループに分けたほうがいい。また、導入のスピーチがスムーズに進むように事前にスピーチを和訳しておいて読み上げるようにした方がいいので等､貴重なご意見を頂きました｡2 グループに分けることに関してはその予定だったのですが、遅れて途中からの参加者が多かったことや、通訳をお願いできそうな方も遅れていらっしゃったため事前にお願いする段取りが組めなかったという事もありました。来年度は外部も含めて広報し、参加者数が見込めるときは 2 グループでの進行も試して行きたいと思います。また、事前にスピーカーの方に原稿をもらって導入スピーチをしていただくのは通訳者にとっても気が楽なのですが、ボランテイアで参加してくださるスピーカーにあまり構えたお願いをするのが申し訳ない、スピーカーも参加者も構えず気軽に参加できるおしゃべりサロンというスタンスで開催していたということもありました。ただ､このようなご意見も頂いたので､今回のようにハッピーデーに合わせたしっかりとしたテーマを設定した場合は特に、ある程度スピーカーの方と事前に内容と方向性を話し合って把握し、必要に応じて事前に翻訳原稿を作成しておくという対応もとって行きたいと思いました。今回は今年度最後のおしゃべりサロンということで、最多の参加者でしたが、次年度に向けての課題も得られたので、参加者の方により満足していただき、何度も参加していただけるようなおしゃべりサロンにしていきたいと思います。

ドルジさんより導入スピーチ：

ブータンは 1970 年代から国民総幸福（GNH）を国の目標に掲げ、幸せ発展を目指してきました。この GNH の理念は、国の経済的発展はもちろんですが、それよりも国民の幸福発展を重視している部分が特徴的です。
その実現のため、GNH 委員会という組織が全ての省庁のトップに位置し、そこが各省庁から上がってく

る法案について、国民の幸福を実現するものであるかどうかを諮り採用不採用を決めています。では、このGNHの方針が教育現場でどのように取り入れられているのかをチェドンさんが説明します。

チェドンさんより導入スピーチ：

スケジュール帳が埋まっている多忙な中、皆さんお集まりいただきありがとうございます。私は日本人の友人や先生と会う約束をしようとするたびに其々がノートを取り出すのをふしぎに思っていましたが、ある日それがスケジュール長で、ほぼびっしり書き込まれていると知ってとても驚きました。ブータンでは見かけない光景なので、今でもとても不思議ですが、日本人がいかに忙しい毎日を送っているのかがよくわかります。では、今から、学校教育におけるGNHについてご紹介します。それは８つの項目になっていて、Green School for Green Bhutan　というスローガンの下実施させています。

1、自然／環境の緑化　Natural/Environmental Greenery

人間と自然との深いつながりを理解し感謝することで、学校敷地内やその周りを植林や花壇、畑の耕作などを通して、地域の人と共に少しでも多くの緑化に繋げていきます。例えば、学校のバザーなどの収益金でケーキなどを買う代わりに苗木を買いみんなで植林したりしています。

2、学問の緑化　Academic Greenery

すばらしいアイデアの恵みを発見するということです。教育は事実の学習ではなく、考える心の訓練です。教師と生徒はさまざまな疑問をお互いにアイデアを出し合って積極的に交流し、学びを深めていきます。学校はさまざまな科目の基礎を教え、学生は将来の夢と希望に導く知識かを見極めていきます。

3、精神的な緑化　Spiritual Greenery

精神的な緑化とは自分自身を見て依り高いレベルの意識につなぐということです。私達は自分の行動を観察し、自分たちより優れている誰か（神）の存在を知り、信じることを意味します。私達は祈りを通し、彼らと直接繋がり、大いなる知恵を味わうことが出来ます。私達はカルマを神事、今日の自分は過去の行為の結果であり、今日のことは自分たちの未来に結果をもたらします。カルマの力を信じることにより、他の人に優しく、親切にすることができるようになります。

4、審美的な緑化　（情緒的な成長）Aesthetic Greenery:

美しく、優雅で味わい深いものを賞賛する。私達は良いか悪いかに関係なく、全ての存在しているものに感謝しなければなりません。なぜなら全ての生きとし生けるものには存在理由があるからです。生命を肯定する魂があれば、最悪のものから最高のものを引き出すことが出来る。あらゆる状況に立ち向かうには精神的にポジテイブでなければなりません。

5、社会的な緑化 . Social Greenery:

共に生き、共に学ぶことを学ぶ。社会的な緑化とは、生徒と両親、生徒と教師、親と教師、学校とコミュニテイーの間に慈悲深い関係を構築し、全体的な発展を促すことを意味します。

それぞれの目的と望みを達成するために、それぞれの目標を知るためにお互いに深く繋がりあい、協力し合ってお互いに成長して行く事が大切だということです。

6、道徳的な緑化　Moral Greenery

成績よりも善良さ、競争よりも協力、勝利よりも公正さ。道徳的な緑化とは何が良いか悪いか、正しいか誤りか、長所と短所、そして真実と偽りを知ることができることを意味します。

学校は生徒達の人生の中で、彼らの道徳的な指針を正しく導いていく場所として真に最適な所であるといえます。たとえば「人の幸福が自分の幸福」という価値観は、算数の問題で「○○さんがりんごを３個持っていました。1 個たべたら残りは何個でしょう」だったものを、「○○さんがりんごを３個持っていましたが、お友達と２個一緒に食べました。○○さんはどう思ったでしょう」に変わり、問題文の表現などに反映されています。

7、知性の緑化　Intellectual Greenery

知性の緑化とは、日々心の力を鍛え、発揮することを意味します。私たちの能力は、肉体的な能力の優位性で判断されるのではなく、いかに　思考が健全で精神的に強いかで判断される必要があります。私たちの心は思っている以上に力を持ち、この力を支配して制御すれば、「心は宇宙であり、あらゆる可能性を完全に生み出す力がある」ということです。

心に関係する科目は、学校では非常に稀にしか教えられていませんが、非常に重要で、日常の生活の中でそれを知って感じることが重要です。

8、文化の緑化　Cultural Greenery

私達の古くから伝わる伝統文化を深く学び、未来に伝えていく努力をするということです。それらは根本的な価値館や生きる道を示してくれます。国民として後世に伝えていくべき伝統芸能や衣装、儀式、言語、国章、さらに人と人との関わり方まで教えてくれます。それらの家庭における伝承、教育はもちろん、学校では祝日の行事開催、寺院の訪問、さらにさまざまな活動を通して積極的に伝統文化教育を行っています。

他　参加者からのＱ＆Ａ

Ｑ：日本は結構自殺が多いといわれるくにですが、ブータンでは自殺というのは聞きますか？

Ａ：ブータンでの自殺というのは、人それぞれ事情があると思いますが、若い人の自殺で都会でために聞くのが、交際関係で悩みお酒を飲んだ勢いで自殺とか、ドラッグ問題での自殺などだけです。

Q：福井の中学生が指導死といわれる教師によるパワハラで自殺をしました。そのような指導死というものはブータンにありますか？

A：その先生はいったいどうしたのでしょうか？ブータンにもいろいろな子供達、生徒が居ますが、そのような子供達に対しては学校のカウンセラー、担任、親がみんなで連絡を取り合い、一緒に協力してその子に合った適切な指導をしていくので、指導によって自殺というようなことは考えられません。

Q：パワハラというのはブータンにありますか？学校でも、校長先生や教頭先生からもっと生徒の成績をあげろというようなプレッシャーが先生たちにかかってくる、パワハラがある場合があるのですが。

A：パワーハラスメントという言葉はブータンにはありません。確かに生徒のために成績を上げていこうという努力は、学校全体で、校長も教頭も力を合わせて一緒に考えて一緒に取り組んでいくという事はありますが、一方的にプレッシャーを与えるという形ではありません。

Q：ブータンでも農村部で老人の孤独死というのがふえていくのではないですか？

A：確かに、故郷を離れて都会で働く若者が増えているので、近所同士で声を掛け合う農村部でも老人の孤独死というケースが出てきていると聞いたことがあります。ただ、家族がたとえ離れて暮らしていても、インターネットでビデオチャットを毎日家族や親戚みんなでやっている人が多いので、老人の孤独死というケースはまだ少ないと思います。

Q：ブータンでも残業はありますか？

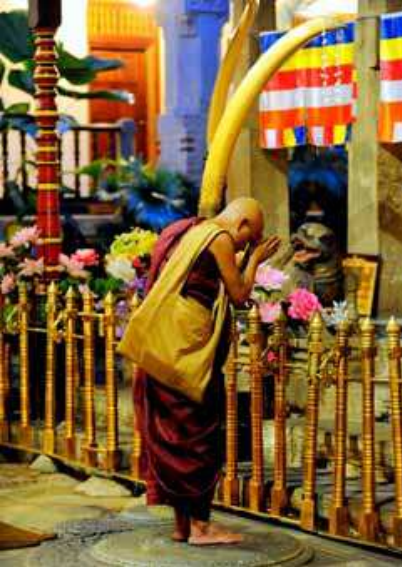
A：ブータンでも、国の行政機関などの一部の省で一定の時期忙しいために遅くまで働いたりするというのを聞いたことがありますが、学校などでは反対に全員 17:15 分までに帰らなければならないという決まりがあるほどなので、残業が出来ない状況となっています。

Q：ブータンの若者は外国で働きたいと思う人が多いか、国内で働くのを希望している人が多いか、どちらですか？

A：ブータン人は皆、外国では物価も高いので、同じ生活をするためにより多く働いて、家族や友人と過ごす時間がなくなるということを知っているので、国内での仕事を希望していると思います。

栗原事務局長から最後に：
GNH に関する色々な資料の中にこんな文章を見つけ、人の幸福とは何かを知る上でとても分かりやすいと思ったので紹介します。

人の幸せには２種類あり、短期間で終わる幸せと長期に持続する幸せです。
短期間で終わる幸せは、その人の地位（Status）に関わる、手でつかめるような物質的な豊かさで得られる幸せです。（車、お金、家、洋服など）
長期的に持続する幸せとはその人の地位に全く関係のない、手でつかめないもので得られる幸せです。（人間的なかかわり、家族関係、自然、時間のゆとりなど）



アジアの村を歩く

１８　祈りの島　スリランカ
聖地　キャンディ

写真・文　松田宗一
（写真家・福井県大野市在住）

12 年かけて作られた人造湖「キャンディ湖」から仏歯寺を望む

「聖地　キャンディ」として
198 8年ユネスコ世界文化遺産登録
町のシンボルは仏陀の犬歯を安置する
「仏歯寺」

一日 3 回のプジャ（礼拝の儀式）では
犬歯が納められた黄金の舎利容器を
ちらりと見る
止まる間もない行列の中で
一瞬の出来事に思えた

ペラヘラ祭りのゾウが通れる高さのトンネルを
くぐって本堂（左写真）へ

肌の過度な露出や華美な服装は入場を断られる。原則は白。
そこで寺の前の露店で必要な布や衣服を購入することになる
手には供花

礼拝の儀式は、太鼓やラッパによる演奏で始まり２階の展示室へ向かう。
犬歯の置かれている小部屋の扉が開かれ、参拝者の眼差しが注がれる

編集後記

福井県は今年、３７年ぶりとなる豪雪に見舞われました。被害に遭われた方には心からお見舞いを申し上げます。

厳しい冬を超え、短い春が過ぎ、すでに初夏の気配を感じる今日このごろです。気候の変化とともにスタッフの士気も高揚し、現在、ブータンミュージアムでは色々な企画にとりかかっております。近々、新しい企画展を披露する予定ですので、楽しみにお待ちください。

さて、話は戻りますが、２月の豪雪時、実は福井にはスペシャルゲストが滞在していました。ブータンミュージアムのポスターやパンフレットにも度々使われている『山と少女』の写真をご存知でしょうか。あの写真に写っている少女、ソナム チョキさんです。あの写真は２００９年に撮影されたものなので今は素敵な女性に成長されていますが、顔立ちや雰囲気は以前のまま。がんばり屋さんで、とても礼儀正しい方でした。１月の中旬から２月の中旬まで福井に滞在されていたので、豪雪をまともに経験されたわけですが、めげずにブータンミュージアムにもほぼ毎日来てくださいました。

ブータンは今、激動の時代を迎えています。「幸福の国」「地上の楽園」などと呼ばれていますが､近代化に伴って様々な問題が生じており、ブータンで生きる人々は日々それらの問題を乗り越えようと一生懸命です。ソナムさんのようなお若い方でも、大学で学ぶかたわら日本語の勉強に精一杯打ち込んでいて、これからのブータンを切り拓く若者の熱意、可能性を間近に感じることができました。

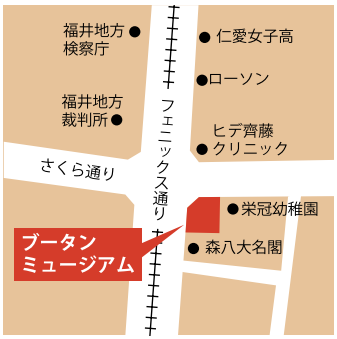
私は今のブータンも素晴らしいと思っていますが、ソナムさんが大人になり、仲間たちと築くこれからのブータンにも興味が湧きました。１０年後、２０年後のブータンは、きっともっと魅力的な国だろうと大きく期待しています。

（ブータンミュージアム　事務局　河﨑英代）

【発行日】2018年５月１日
【発行元】
特例認定特定非営利活動法人 **幸福の国**
〒910-0005 福井県福井市大手 3-15-12
ブータンミュージアム内
TEL.0776-22-0011 FAX.0776-22-0010
ホームページ http://bhutan-npo.asia/
Ｅメール info@bhutan-npo.asia

ブータンミュージアム

〔定休日〕毎週月曜日〔開館時間〕ＡＭ11：00～ＰＭ5：00



ＪＲ福井駅から徒歩約１０分